

高宮ゼミナールの活動

「庭園とは何か」を設計や施工、維持管理や提案を通して考える

高宮ゼミナール／庭園文化・作庭技術研究室

石内匠 上野公則 坂本直樹 丁諭多 中村淳志 室早良野 渡辺悠希

1. はじめに

高宮ゼミでは「庭園とは何か」を設計や施工、維持管理や提案を通して考えるために、年度によって様々な取り組みを行っている。またその前段として『作庭記』の講読と樹木保全技術習得の一環として簡易樹木診断（本年度は課外にて）も行っている。今年度は『作庭記』にならった庭づくり、西公園のもみじ谷ライトアップの提案と実施、そして昨年度から引き継ぎになっている茶室の仕上げに取り組んだ。

2. 取組の内容

(1) 『作庭記』の講読と紙芝居の制作

『作庭記』は平安時代に書かれた日本最古の庭園書である。当時の寝殿造り建築に対応した庭園の作り方が書かれており、その内容はデザインはもとより、地割りから施工法に及ぶもので、現代でも造園家を目指す者には貴重な指南書である。小笠雅章著『図解 庭師が読みとく作庭記・山水并野形図』¹⁾をテキストにして文献講読を行った。

この『作庭記』には図は全く描かれていない。すべて文章である。そのためテキストの図解を参考に石立て、滝、池、島の項目を紙芝居風に図化してみた（図一1、2）。さらにこの手順やイメージを実際に施工することでわかるのではないかと考え、枯山水と池の施工に取り組んだ。



図一1 作庭記紙芝居 石立て

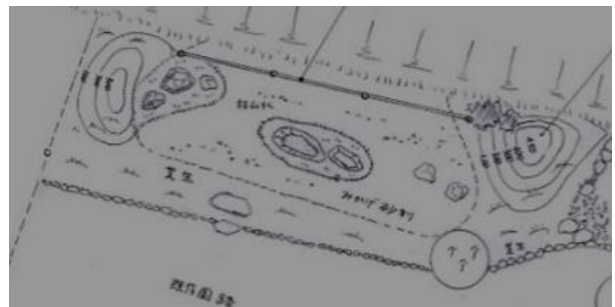


図一2 作庭記紙芝居 滝

(2) 『作庭記』にならった庭づくり—枯山水

重森完途によると、枯山水の語の文献初出は『作庭記』である。但し、『作庭記』当時の枯山水は水流のない野筋や傾斜面に石を組んだ築山のようなもので「前期」にあたり、龍安寺や大仙院のような平庭に白砂や苔を敷いて石を立てるデザインは「後期」にあたると述べている²⁾。当ゼミでは敷地の形状により後期式の枯山水とし（図一3）、『作庭記』中の「逃げる石が1~2個に対して追う石

は7~8個」³⁾「立っている石があれば臥せている石もある」⁴⁾等の記事を参考に設計し、「大小の石を運び集めて、（中略）「庭」上に取り並べておく。」⁵⁾「穴を掘って石を据えたならば、埋め戻す土は、石の下あたりを十分に突き固めて（後略）」⁶⁾等とあるのを、その作業手順や要領の通りに施工してみた。



図一3 計画図(枯山水部分)

【施工内容】

- ・除草、測量、設計後、石を選んで、一石ずつ石を立てる現場に引き寄せた。
- ・主石を決めて、立ててから、次の石が主石と跨った状態になるように立てた。（写真一1）
- ・築山工
- ・縁石工
- ・苔貼りと芝貼り
- ・竹垣（四ツ目垣、御簾垣）
- ・化粧砂利敷き



写真一1 石立て

【結果と考察・感想】

まず石を選ぶことから時間がかかり、据付けも深く据えると石が小さく見えることなどを実感した。デザインは時代とともに変わっても手順や要領は『作庭記』と現代とでほとんど変わらないことがわかった。

また、完成した時（写真一2）、確かに綺麗にできたと思ったが、何かが足りないと感じ、それが何なのかを検討した。施工を始めた当初は単純に枯山水を作ってみようだけ考えていた。今、自分達が納得できないのはこの枯山水には禅の世界観のような、思想、精神がないことである。『作庭記』の冒頭に作庭するときの心得として、「まづ大旨をこころふべき也（中略）家主の意趣を心にかけて、我風情をめぐらして、してたつべき也。」⁷⁾とある。単につくるのではなく、自分もしくは施主が

求める世界観を考えながら庭をつくるのが大切であるとわかった。



写真—2 完成

(3) 『作庭記』にならった庭づくり—池づくり

『作庭記』を読んで平安時代にも池を造っていたことを知り、当時の作り方を調べて施工した。『作庭記』には池は東から水を引き入れ、西南方向に排水するのが良いとしていて、これを参考に東南から注水し、西よりに池を設け、西北に排水することにした。『作庭記』には施工方の記事はないため、京都の平等院庭園の発掘調査⁸⁾と保存整備事業で報告された工法を参考にした。仲隆裕の技術報告「史跡名勝平等院庭園における州浜整備」⁹⁾によると、平等院庭園の保存整備事業では、同時代の高陽院や鳥羽離宮の発掘で確認された州浜の構築技法が採用されている。その技法の概略は下記のとおりである。

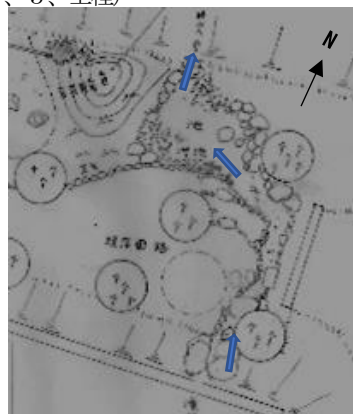
- ・まず発掘遺構面をシートで保護し、石列で区画する。
- ・その中を砂質土層と粘質土層とで交互にタコで叩いて重ね、最上層に粘土を木槌で打つ。
- ・そこに人頭大の石を打ち込むと粘土が締まる。
- ・さらに小砂利を叩き込み、その上に河原石を敷き詰める。最初の石列の人頭大の石が河原石の転落を防ぐ。というものである¹⁰⁾。これを参考にして当ゼミでは下記のように施工した(図—4、5、工程)

【工程】

- ・池を掘り、現場の地山が粘土質であるためそのまま利用し、表層に購入した粘土を木槌で打つ。
- ・粘土の層を石列で区画する(写真—3)。
- ・区画した中にゴロタ石を木槌で叩き込む(写真—4、5)。

【結果】

実際に注水し観察したところ、通水1時間程度で濁りは減り始め(写真—6)、



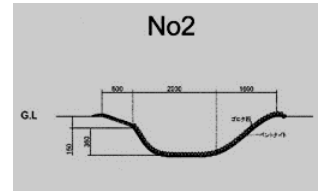
図—4 計画図(池部分)

粘土が洗い流されるということはなかった。

- この工法でつくと
 - ・粘土が安価で施工費用が抑えられる。
 - ・大きさと形状を自由にできる。
 - ・景観上人工物が少ない。
 - ・撤去が容易である。
- 等のメリットがある。逆にデメリットとしては、
- ・大雨や動物の影響で形状が変わり、修復が必要。
 - ・水質や水量によっては藻の発生が予想され、しかも根を張りやすい。
- といったことである。

【考察】

粘土の池は現代ではピオトープでよく作られるが、コンクリートのなかった平安時代に作られた池は、粘土を利用し、そこにゴロタ石を埋め込み、護岸を州浜にすることで素掘りの池よりも厳かな印象となり、修景性が高くなっていると考えられる。



図—5 計画断面図(部分)



写真—3 石列で囲む



写真—4 石列内に石を打ち込む



写真—5 池底に石を打ち込む



写真—6 注水状況

(4) 茶室と露地

露地とは茶庭のことである。当ゼミでは伝統的な作庭技法に触れるため、毎年露地をつくっており、昨年からは露地と合わせて茶室をつくっている(写真—7、8)。

千利休は「露地はただ浮世の外の道なるに心の塵なぞちらすらむ」と詠んでいて、露地は雑念を払って茶室に向かうための道なので、静かな風情を残した飾らない姿がよいとし、形式的な茶の湯よりも、茶と向き合う精神

を重視し侘茶を大成した。当ゼミではこの侘び茶の雰囲気を目指し、引継ぎとなっていた屋根を仕上げた。

北尾春道『茶室の材料と構法』によると茶室の屋根は低いのが良いとされている。また茅葺きやこけら葺きが軽やかで好まれる³⁾。これらのことを調べ、こけら葺きに似た杉皮葺きを採用した。(写真-9)



写真-7 ゼミの露地のつくばい

【施工内容】

- ・杉皮を押さえる割竹をつくる(写真-10)
- ・屋根に上って杉皮を葺く(写真-11)
- ・半割竹で押える

【感想】

杉皮を少しずつ重ねて葺くのが大変だった(図-6)。

茶室を完成させていく中で茶室の歴史や基本的な構造を知ることができた。また露地は伝統的な作庭技術の宝庫なのでこれからも取り組んでいきたいと考えている。

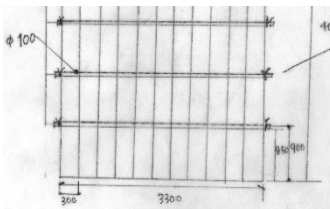


図-6 杉皮葺き施工図(部分)



写真-8 室内



写真-9 材料の杉皮(市販)



写真-10 竹を割る



写真-11 杉皮を葺く

(5) 西公園もみじ谷ライトアップ

福岡市中央区にある西公園に、もみじ谷というイロハモミジが植栽されている一画があり、もみじのライトアップを西公園の指定管理者であるにしてつグループと協働で行った。このイベントを利用して①人々が「秋の夜、秋の庭園」に持っているイメージ、何を期待するのかを探ることが目的であった。また、去年は管理事務所が試験的にもみじだけをライトアップしていたが、今回はもみじ谷の中央まで行ける導線をつくり、②庭園としての空間を感じてもらふこと、その空間を照明でつくることを課題として取り組んだ。

【方法】

①については来場者にアンケート調査を行う。

<主な設問>

- ・年齢、性別 ・来場方法 ・西公園の利用頻度
- ・このライトアップイベントを何で知ったか
- ・「秋の夜」「秋の庭」と聞いて何を思うか
- ・このイベントについての意見、感想

②についてはイロハモミジだけでなく、谷内の奥にある大ぶりの石組みを照射し、手作りランタンを添えて、もみじ谷の空間全体を浮かび上がらせることにした。

【経過】

6月にスケジュールを打ち合わせ、8月に保有機材の確認、夜間の現況や駐車場からもみじ谷までの現況等の確認を行い、10月に提案書を作成してプレゼンテーションを行い実施項目を決定した。

<主な提案内容>

- ・管理事務所が保有している照明器具の他に、地元商工会が桜まつりに使っている提灯を借りて誘導に使う
- ・現地に明かりが少なく、園路が細い、デッキ等の施設に段差があるため、手作りランタンを制作して追加する
- ・期間中公園内に誘導のための案内看板を設置する
- ・会場の剪定刈込、園路の整備、谷の中央にあるデッキとベンチの活用とそのための安全柵設置(図-7)
- ・照明器具の配置場所(図-8)

等を提案し、詳細を協議して実施した(写真-12)。

・ライトアップ期間 11月20日～24日



図-7 会場整備予定図(部分)

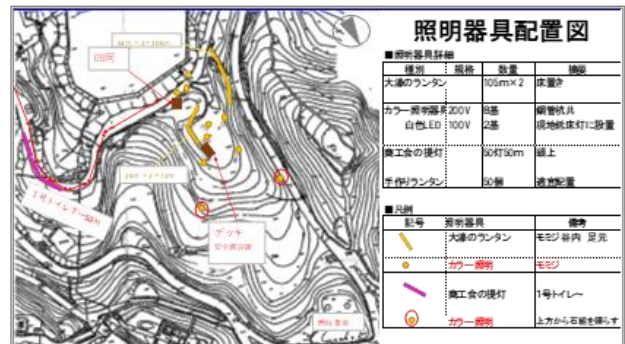


図-8 照明器具配置図(部分)

【結果】

- ・5日間の来場者数:推計205人前後(91グループ)
 - ・アンケート回収:89件(来場グループ単位98%)
- 来場者の傾向は、毎日～月1回程度の利用者が83%

で来場方法は徒歩または自転車が85%であることから、地元で日常的に利用する人たちが案内看板をみて立ち寄ったケースが多かったと考えられる。

男女比では女性が若干多く(図-9)、年齢層は20代から60代迄幅広く、70代以上の高齢者は少なかった(図-10)。夜間の時間帯であることが要因であろう。

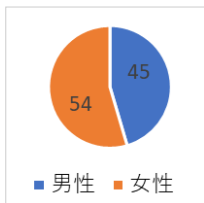


図-9 男女比 (%)

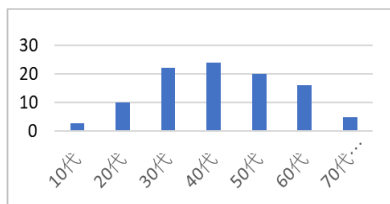


図-10 年齢層 (人数)



写真-12 ライトアップ実施状況

「秋の夜」、「秋の庭」と聞いて何を思うかとの問いの答えは1位 紅葉 2位 月 3位 虫の声となった。

三要素のうち「虫の声」は開催期間中も現地の草むらから聞こえていた。「月」は会場が高木に囲まれているため上空が樹冠でふさがっており、夜空が見える部分が少ない。そのため三日月をごくわずかな時間みる程度であった。開催時期が早かったため、「紅葉」は六分程度でなかなか進まなかった。

このアンケート結果に基づいて現地の写真を使って合成画像を作成してみたところ、「秋の夜の庭」について多くの人が持っているイメージが見えてきた(写真-13合成画像)。このイメージは多くの人が共有していると同時に秋の夜の庭園の理想のイメージとも言えるのではないだろうか。

このイメージを実際に見るためには、まず秋の虫が生息できる草むらがあること。第二にある程度開けた空間であること、第三に紅葉がすすむ順当な気候であることが必要である。この三つは我が国では当たり前享受できた環境であり、近年では都市化と温暖化によって失われつつある環境でもある。庭園にはそのような前提条件

表-1 秋の夜・秋の庭と聞いて思うもの (人)

1.紅葉	33
2.月	30
3.虫の声	16
その他静寂、読書等	10

とも言える失ってはならない環境の確保が必要であると言えるだろう。

また、谷奥の石組みを照射して、空間全体を浮かびあがらせることにも成功し、敷地内を歩き回る家族もいた。にしてつグループのマネージャーからアドバイスをいただいたことが大きかった。その他概ね好評であった(表-2)。

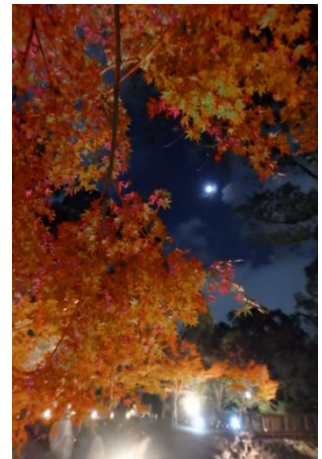


写真-13 「紅葉・月・虫の声」

3.まとめ

『作庭記』を出発点にして作庭に取り組んだことで、石立の心得や手順は当時は現代も変わらないこと、当時の池の工法とゴロタ石張りの効果がわかり、また西公園のみじ谷ライトアップイベントをとおして、人々が秋の夜の庭について持っているイメージを具体的に知ることができた。これらの取り組みを通して得たことから、今私たちが考える「庭園」とは—

- 庭園とは芸術である。(石内 枯山水担当)
- 一人の心境と庭の精神や世界観がぶつかり合って、あるバランスをとり、一体化することである。(丁 枯山水)
- 自然の材料を利用して自らの望む思想や理想郷を再現し、所有するもの。(上野 池担当)
- 見て楽しむもの、楽しむために樹木や花を植え、噴水や花壇を作ったりすること(坂本、中村 池担当)
- 風情を感じる場所(郷原、室 茶室担当)
- 庭園とは「やすらぎ」(中村、渡辺ライトアップ担当)。

<補注・参考文献>

- 1) 小埜雅章『図解 庭師が読み解く作庭記・山水并野形図』学芸出版社、2016年
- 2) 重森完途、石元泰博『新装版日本の庭園3 枯山水の庭』講談社、1996年、126頁。
- 3) 小埜前掲書(1)101頁より引用。
- 4) 小埜前掲書(1)107頁より引用。
- 5) 小埜前掲書(1)95頁より引用。
- 6) 小埜前掲書(1)108頁より引用。
- 7) 小埜前掲書(1)15頁より引用。
- 8) 宇治市教育委員会『平等院阿彌陀堂中島発掘調査報告』(宗 平等院、1991年)。
- 9) 仲隆裕「史跡名勝平等院庭園における州浜整備」『造園技術報告集No.2』日本造園学会、2003年。
- 10) 仲前掲論文9)。
- 11) 北尾春道『茶室の材料と構法』彰国社、1967年。

表-2 多かった意見、感想 (人)

1.美しい、綺麗	15
2.時期が早い	11
3.宣伝してほしい	5